

【氏名】大八木 豪

【所属大学院】（助成決定時）東京大学大学院

【研究題目】日系アメリカ人の歴史認識とリドレス運動

#### 【研究の目的】

第二次世界大戦中に、アメリカ合衆国政府によって強制立ち退き・収容されたことに対する、日系アメリカ人の公的謝罪・補償要求運動であるリドレス運動を、合衆国の政治的・社会的構造と運動のアクターである日系アメリカ人の意識・行動との歴史的相互関係の中に位置づけ、その意義を考察することを第一の目的とする。この大きな目的に向け、ここでは、リドレス運動が生成し進展して行く最初期である 1960 年代末から 1970 年代初めの時期の日系アメリカ人の歴史認識を明らかにすることをさしあたっての目的としたい。リドレス運動が戦時中の体験を問い直す社会運動である以上、日系アメリカ人の歴史認識は、その文化的フレーミングの形成に深く関わっていると考えられるので、この研究は、上記の最終的な目的を達成するために必要な作業である。具体的には、日系アメリカ人の強制収容所跡地への再訪、歴史展示、そして歴史教育の事例の分析を通して、日系アメリカ人の歴史認識がどのようなものであったのかについて考察する。

#### 【研究の内容・方法】

本研究は、政治学・社会学における社会運動理論を参照しながら、リドレス運動がその最初期にどのように生成、発展したのかを歴史学的手法を用いて明らかにしようとするものである。その際、東京大学、慶應大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、同大学バークレー校の各図書館、そして全米日系人博物館にて収集した一次資料などを用いて以下の研究を進める。

1969 年 11 月 29・30 日に、アーカンソー州の「日系アメリカ人記念日」を定めることを記念して、同州内に第二次世界大戦中に建設されたローワー収容所跡地で、退役軍人の参加の中式典がとりおこなわれた。この式典で、日系アメリカ人は戦時中の「苦難」にもめげなかった愛国者、そして成功者として賞賛された。しかし、その一方で、合衆国政府の戦時中の日系アメリカ人に対する行為が問題化され、その責任が問われることはなかった。

他方、カリフォルニア州のマンザナー強制収容所跡地にまつわる催しが、1969 年末から定期的に行われることになった。1970 年代初めにかけての時期のこの催しでは、合衆国の不正義の歴史とその催しの当時存在していた不正義との結節点としてマンザナーをとらえ、戦時中の日系人の収容所体験を教育する必要があるということが、繰り返し説かれていた。そして、この若い世代によって形成された歴史認識は、「モデル・マイノリティ」言説を拒否し、他のマイノリティ集団と連帯しようという姿勢と裏表であった。その時、強制立ち退き・収容の被害者である二世がその体験について黙して語らないことが問題視された。

また、強制収容所跡地への個人レベルでの再訪、高校の日系人の戦時体験についての特別授業、「行政命令 9066」や「誇りと恥」と題された歴史展示といった事例は、この時期に、強制立ち退き・収容の記憶が、様々な形で思い出し、語られ始めたこと、また、その必要性に対する認識が、日系アメリカ人コミュニティに浸透しつつあることを示している。

#### 【結論・考察】

1960年代終わりから70年代初めの時期、日系アメリカ人の中で、戦後一貫して戦時中の強制収容所体験について沈黙を守ってきた姿勢とは対照的に自らの体験を思い出し、語る動きが起きた。しかし、ここで見られる日系アメリカ人の歴史認識は、多様なものであった。二世の退役軍人が参加したローワー強制収容所では、モデル・マイノリティ言説に則った日系アメリカ人の成功物語が語られる一方で、戦時中の合衆国政府の責任が問われることは無かった。それに対し、三世が主に参加したマンザナー強制収容所関連の催しでは、モデル・マイノリティ言説を否定すると同時に、合衆国政府の不正義が追及されたのである。そして、後者の歴史認識は、リドレス運動の文化的フレーミングに適合的なものであった。

このように多様な歴史認識が、リドレス運動の進展に伴い、日系アメリカ人コミュニティの中の権力関係やアメリカ社会との関係の中で、相互にどのような影響を及ぼし統合されてゆくのかを分析するのが次の課題となる。